#ガチテリアスガール

真爱型女孩

#復学初日を終えたは、帰路の途中にあるスーパーマーケットに入った。

结束了复学的第一天，银华走进回家路上的一间超市。

#　買い物カゴ片手に弁当コーナーに足を運ぶ。このスーパーは輸入食料品を大量に扱っていることもあり、弁当の数も種類も豊富だった。

银华单手拎着购物篮，走向熟食区。这家超市出售大量进口食品，便当的种类和数量都很丰富。

#「ふぅー……」

「唉——……」

#　色とりどりの弁当を眺めているうちに、自然と溜め息が出た。

银华看着形形色色的便当，自然而然地叹了口气。

#　頭に浮かぶのは今日の出来事。ちなみとの一件だ。

又想起来今天的事了。和速水千海的那件事情。

#　あの後、速水が泣きむことはなかった。

在那之后，速水也没能止住她的泪水。

#　他の女子たちから、今日はそっとしておいたほうがいい、とアドバイスされたため、速水とわらないことにしたが、お互いに強烈なシコリが残ったことは間違いない。

之后银华听着其他女生给自己的建议，一天都和速水保持着距离，没再靠近她。但毫无疑问，两个人给对方留下的印象都相当深刻。

#　けして学校生活が順調にいくと思っていなかったし、いつかはトラブルにぶつかることを覚悟していた。

银华决没有认为自己的学校生活会一帆风顺，自己早已做好准备面对任何困境。

#　だが、まさか一日目からこんな失敗をするなんて。

但是，没想到才第一天，就搞得这么失败。

#　──すでに貴様らは我らと同じの住人。

——你们与我们一样，已是黑暗的居民。

#　かつて耳にした言葉とがり、銀華の口の奥を苦々しくさせる。

曾在耳边的嘲笑再一次回响，不禁让银华的心里泛起苦涩。

#　自分はあの殺伐とした戦いに決着をつけ、人が生きる世界に帰ってきた。

自己已经彻底告别了那个充满杀戮的站场，回归了人类的世界。

#　果たしてそれは正しいことだったのだろうか。

难道说到头来，他说的那些才是正确的？

#　首を横に振る。この迷いこそがあの言葉の目的だ。敵の思惑に踊らされてはいけない。自分は一刻も早くこの世界にまなければならないし、これ以上今日のようなトラブルを起こすわけにはいかない。

银华摇了摇头。这样的迷茫就是那番话的目的。不能被敌人的想法影响。自己必须要尽快融入这个世界，决不能再惹出今天这样的麻烦了。

#　だが、どうすればいいかわからない。圧倒的に経験が不足している。

但是，银华也不知道该怎么办才好。自己在这方面的经验还是太过缺乏。

#　あの華やかなクラスメイトならこの答えを出せるのだろうか。

那位打扮靓丽的同班同学说不定就可以回答这个问题。

#「……か……」

「盛黄琉花……吗……」

#　速水とのトラブルが長引かなかったのは盛黄が取りなしてくれたおかげだ。彼女がいなければもっとこじれたことになっていたかもしれない。

自己和速水的纠纷得到及时阻止，都是多亏了盛黄在其中调停。要是没有她在，说不定自己会把事情搞得更麻烦。

#　彼女には改めて感謝を告げなければいけない。そして、

必须要再次向她表示感谢。以及，

#「もう一度速水に謝ろう……」

「再向速水道次歉吧……」

#　なにはともあれ、それが最優先だ。

不管怎样，这是自己最该做的。

#　銀華はもう一度溜め息を吐いてから、弁当コーナーからタイ料理を手に取り、買い物カゴに放り込んだ。

银华再次叹了口气，从熟食区拿起一份泰式料理，放进了购物篮里。

#

#　　　　◆　　　◆　　　◆

　　　　◆　　　◆　　　◆

#

#　次の朝、琉花が箱で出会ったひなると一緒に教室に入ると、めいりがおもむろにスマートフォンを見せてきた。

第二天早上，琉花在学校的鞋柜旁遇到了日菜瑠，和她一起走进教室。看到芽里缓缓地向她们递来手机。

#「つーわけで、彼氏にリップクリーチャー買ってもらいました」

「也就是说，你男朋友把口红买给你了」

#　めいりのスマートフォンではメッセージアプリが起動されており、『ほんとにいいの？　むりしないで』『大丈夫！　おれ今月金持ちだから笑』『ありがとう　だいすき』『おれも♡♡♡』というやり取りが表示されていた。

芽里的手机上打开着一个聊天APP，『真的可以吗？不用勉强哦』『没关系！咱这个月有钱得很（笑）』『谢谢 最喜欢你了』『我也是♡♡♡』上面显示着这样的聊天记录。

#「「うーわっ……」」

「「唔——哇……」」

#　琉花とひなるが顔をしかめると、めいりは意外そうに言った。

琉花和日菜瑠皱了皱眉头，芽里有些意外地说了。

#「なんでドン引き？」

「你们怎么这么让人扫兴？」

#「や、朝からカロオバ文章見せられて胸やけ起こしたっつーか……」

「不是，应该说一大早就看到这样糖分过多的聊天有点恶心吧……」

#「めいちの彼ピっておっさんだし……心配だも」

「芽亲的男朋友好像是大叔来着……让人担心嗼」

#　二方向からの批評を聞いて、めいりはスマートフォンを遠ざける。

听到两种不同方面的评价，芽里收回了手机。

#「おっさんじゃなくて大学生だって。しかもモデルの」

「不是大叔，是大学生。而且是模特」

#　めいりの恋人は読者モデルの撮影で知り合った大学生だ。

芽里的男朋友是在她当读者模特在拍摄的时候认识的大学生。

#　琉花としてはひなるが言うほどおじさんとは思っていないが、高校生に手を出す読者モデルの大学生──しかも二年留年している──はかなりく見えた。恋愛に年の差は関係ないと思うが、美女や美少女れるモデルので、わざわざ高校生に目をつけるだろうか。

虽然琉花没觉得会像日菜瑠说的那样是个大叔，但会对高中生出手的读者模特的大学生——而且还留级了两年——可谓是令人感到相当可疑。这并不是说恋爱两人的年龄差，而是这种在到处都是美女和美少女的模特圈子里特意盯着高中生下手的行为。

#　とはいえ、昨日みたいにマジギレされかけても困る。

但总之，要是又像昨天那样差点吵起来就麻烦了。

#「よーし、めい。テイクツー行くわ」

「好——，芽。那我就再来一遍咯」

#「は？」

「什么？」

#「う～ん、めいには優しい彼氏がいてましいなぁ～。あたしも欲っしいなぁ～」

「唔~嗯，真羡慕芽能有这么棒的男朋友啊~。我也好像找一个呢~」

#「それぜってぇ思ってないやつじゃん」

「这不是完全没有这么想的样子吗？」

#　めいりはそう言うと、琉花のをぷにぷにとつっついてきた。これくらいの報復でが下がるのなら甘んじて受け入れよう。

芽里一边这么说着，轻轻地戳了戳琉花的脸。只是这样报复一下就能让芽里消气的话，琉花还是心甘情愿的。

#　琉花が苦笑いを浮かべていると、ひなるが不思議そうに言った。

琉花苦笑几下，这是日菜瑠意外地开口了。

#「てか、前から思ってたけど、るかちんってなんで彼氏つくらないんだも？」

「对了，我之前就有想过，感觉琉花亲像是不会找男朋友的那种嗼？」

#「なんでって……なんで？」

「什么那种……为什么？」

#「だってるかちんって男子にモテんじゃん？　さっき彼氏欲しいつったじゃん？　それならつくればよくね？」

「因为琉花亲不是很受男生欢迎吗？刚刚不是又说想找男朋友吗？既然这样找一个不就好了吗？」

#　そう言うと、ひなるは手元の袋からを取り出し、口の中で転がし始めた。

说完，日菜瑠从手边的袋子里拿出一颗糖，放到嘴里含来含去。

#　ひなるは言葉通りの解釈をしたようだが、『優しい彼氏がいて羨ましい』と言ったのは、めいりをなだめるための方便であって本意ではない。

日菜瑠只按字面意思理解了刚刚说的话，但琉花说的『好羡慕你有个这么棒的男朋友』只是为了方便安慰芽里，并不是真的。

#　そして、なぜ恋人をつくらないかということの答えは決まっている。

而且，琉花早就想好如何回答为什么不找个恋人呢？这样的问题了。

#「そんなの……あんたらと一緒にいたほうが楽しいからに決まってんじゃん！」

「比起那种……当然还是因为和你们在一起更开心！」

#「「へっへっへっへっ」」

「「诶诶诶诶」」

#「この流れ、何回やっても楽しいわ～」

「像这样的聊天，不管多少次我都很开心~」

#　琉花たちがくだらないやり取りをしていると、急に教室がしんと静まった。

琉花几人正在聊天打发着时间的时候，教室突然间安静了下来。

#　銀華が登校してきたのだ。

四十七银华到学校了。

#　昨日と同じように銀髪銀眼と端正すぎる顔を輝かせ、昨日と同じようにギラギラとアクセサリーを揺らしている。

与昨天别无二致的银发银瞳，和过于端正的五官闪烁着光芒，与昨天别无二致的亮闪闪的首饰来回晃动。

#　クラスメイトたちの息が詰まる。昨日の事件を目前にした女子たちはもちろんのこと、男子たちも同じような反応だ。彼らも女子たちになにかがあったと察しているらしい。

班上的同学们都屏住了呼吸。见证了昨天的事情的女生们自不必说，男生们也做出了同样的反应。他们像是从女生的反应中察觉了什么。

#　四十七は自分の席にスクールバッグを置くと、教室の前方、ちなみに向けてその足を進めていった。

四十七把学生包放到自己的座位上，然后就走向了教室的前方，向千海迈开了步伐。

#　ちなみの表情が緊張と不安でむ。自分を泣かせ、心の秘密をいた相手が弓矢のように近づいてくるのだからその反応は当然だ。しかし、周囲は四十七の動向を観察することに意識を割いているようでも動かない。

千海的表情因为紧张和不安显得有些僵硬。不过这也是正常的，因为那个弄哭了自己，让心里的秘密暴露在大家面前的人正像利箭一样向她靠近。不过，周围的同学们都一动不动地关注着四十七的举动。

#　四十七はちなみの前で立ち止まると、

四十七走到千海面前站住了，

#「速水……さん。改めて昨日の件についての謝罪がしたい。申し訳なかった」

「速水……同学。我想就昨天的事情再次向你道歉。对不起」

#　とした声で謝罪を放った。

四十七毫不畏缩地道出了自己的谢罪宣言。

#「あ、は、あう……」

「啊，哈，啊哦……」

#　ちなみが言葉にならない声を出す。昨日のように取り乱すことはなかったが、謝罪を受け取る余裕もなさそうだ。

千海发出了支离破碎的声音。尽管她没像昨天那样慌乱，但看起来也接不住道歉的话茬。

#　彼女はおろおろと目をさまよわせ、その視線を一点で止めた。

她的视线慌乱地四处扫动，然后盯住了一个地方。

#　それは紛れもなく琉花に向けられたもので、

这道视线毫无疑问是看向了琉花，

#「……ちょい行ってくるわ」

「……我先过去一下」

#　あんな小動物のような目で頼られたら出ていかざるをえない。

被那样小动物一样楚楚可怜的眼神盯着，实在没办法视而不见。

#　それに昨日の彼女たちを仲裁したのは自分だ。最後まで面倒を見る義務がある……ような気がする。

毕竟昨天也是自己平息了她们两个的矛盾。琉花有种自己有责任彻底解决这件事情……的感觉。

#「ウチらも行く？」

「要我们陪你吗？」

#「や、ひとりで大丈夫……あ、でもこれだけもらってくわ」

「不用，我一个人就行……啊，但是」

#「あー、ひなのお楽しみがー……まあいいけども」

「啊——，日菜想吃的——……算了」

#　ひなるからあるものを強奪し、琉花はちなみの救出に向かった。

从日菜手上夺过一个东西之后，琉花起身前去拯救千海。

#　琉花が近づくと、四十七は不思議そうな表情になり、ちなみは緊張を少し緩ませた。やはり自分が来て正解のようだ。

琉花靠近之后，四十七的脸上看上去充满了意外，千海的紧张则舒缓了不少。果然自己过来是对的。

#「四十七さん。朝から気張りすぎ。ちなみがビビっちゃってんじゃないっ・す・かー」

「四十七同学。一大早就搞得这么紧张。你这样不是都把千海吓・到・了・吗——？」

#　言葉を区切ってふたりの間に手刀をいれると、四十七が気まずそうにした。

琉花一字一顿地说完，伸手把她们两人隔开，四十七看上去有点尴尬。

#「ム……すまない……」

「唔……抱歉……」

#　ちなみだけでなく四十七も緊張しているらしい。もしかすると、四十七は人に謝った経験が少ないのかもしれない。

看来不止是千海，四十七也正在紧张着。难道说，四十七没有什么对人道歉的经验。

#　それなら教えてやりゃいーだけか。

那就让我来教她吧。

#「人に謝る時はワイロはマストだって」

「道歉的时候，是一定要给点贿赂的」

#　琉花がひなるから奪った飴袋を突きつけると、四十七は形のいいを歪ませた。

琉花向着四十七递出自己从日菜瑠手上夺来的一袋糖，四十七皱了皱她形状姣好的眉毛。

#「そんなものを渡しても謝罪にはならないと思うが」

「我觉得就算送这种东西也对道歉无用」

#「んなことないって。激ウマだからコレ」

「哪有那种事。超好吃的这个」

#「……普通の飴に見えるが」

「……看上去只是普通的糖果」

#「うん、フツーの飴だけど？」

「嗯，普通的糖所以呢？」

#「…………それではますますなんの意味がある？」

「…………所以它有什么非常特别的意义吗？」

#「意味ってのは心で感じるもんだぜ」

「意义是要用心去感受的东西哦」

#「………………意味不明だ」

「………………感觉没什么意义」

#「ぶふっ……」

「噗嗤……」

#　噴き出す声が琉花と四十七の会話をった。

从嘴角漏出了一瞬的笑声打断了琉花和四十七的对话。

#　琉花と四十七が同じタイミングで視線を下ろすと、ちなみが口を押さえて震えていた。

琉花和四十七同时往下看去，看到千海正浑身颤抖着按着自己的嘴巴。

#「速水さん？」

「速水同学？」

#「あっ……」

「啊……」

#　ちなみは小さく声を出すと、顔をってうつむいた。口に浮かんだものを隠しているようだが、肩は細かに震えているし、手のからはそれが見えている。

千海漏出一点声音之后，捂着脸低下了头。她想遮住咧开的嘴角，但微微震动的肩膀和手边没遮住的地方出卖了她。

#「……あとはふたりで解決しな」

「……之后你们两个就自己解决吧」

#　琉花は四十七の胸に飴袋を押し付け、身をした。

琉花把糖塞进四十七怀里，转过身走开了。

#　昨日に続いてあたし、いー女度高すぎか？

从昨天开始就是，自己的老好人浓度太高了吧？

#　心の中で調子に乗っていると、後ろから声が聞こえた。

琉花心里微微得意，同时也听到身后传来了声音。

#「昨日、家に帰って考えてみたの……先生たちに言われて四十七さんに話しかけたけど、私の距離のとり方が下手で、四十七さんを困らせちゃった……ごめんなさい」

「昨天，我回家的时候也想了想……我被老师拜托之后就去找四十七同学聊天，是我没有把握好距离，给四十七同学添麻烦了……对不起」

#「速水さんが謝罪することはない。昨日のことは全面的に私が悪かった」

「速水同学不必道歉。昨天全都是我不好」

#「そんなこと……」

「没有这种……」

#「いいや、私が悪い。私は君の心遣いを踏みにじり、衆目の中で屈辱を感じさせた。我ながら極まりないと自省を……」

「没有，是我不好。践踏了你的这份关心，还让你在大家面前难堪。我该好好反省我这愚蠢的……」

#「それじゃあ、お互い様ってことで、どうかな？」

「也就是，我们都有不好的地方，对吧？」

#「……ああ、そうしてくれるとありがたい」

「……是啊，这样就太好了」

#　四十七とちなみの和解を聞いて、教室に漂っていた空気が緩んだ。クラスメイトたちも問題が丸く収まってくれたようで安心しているようだ。

听见四十七和千海的和解，教室里充斥着的紧张的气氛缓解了下来。大家看到同伴同学的问题完美地收场，都放下了心。

#　琉花がさっぱりした気持ちで自分の席に戻っていくと、ひなるとめいりが黙ってを出してきた。

琉花带着舒畅的心情回到了自己的座位上，日菜瑠和芽里默默地向她伸出了拳头。

#　琉花も黙って拳を出し、ふたりの拳にがちっと合わせた。

琉花也抬起手，与她们两个一同碰拳。

#

#

#　琉花は週に二、三回『ビアンコ』という喫茶店でアルバイトをしていた。

琉花每周都会去『比安珂』咖啡店兼职两到三次。

#　学校から近くて給仕服がかっこいい。そんな雑な理由で選んだバイト先だったが、店主夫婦や店員たちと気が合い、比較的楽しいバイト生活を続けられていた。

这家店距学校不远，制服也好看。尽管琉花选择在此打工的理由十分轻率，但她和店主夫妇以及同事们也算处得来，就这样延续着相对算是轻松的兼职生活。

#「おまちどでーす」

「让您久等啦——」

#　を生やした中年男の前にエスプレッソとタルトケーキを置く。

琉花把一杯意式和一块奶油水果蛋糕放到一个胡子拉碴的中年男人面前。

#　接客の口調が軽めなのは店主夫婦の『個性を活かす』という方針にったものだ。琉花としては楽なので助かるが、それでいいのか、と思うこともあった。

店主夫妇奉行『发扬个性』的方针，因此琉花得以对客人用上这样轻佻的语气。

#「ごゆっくりどぞー」

「请您慢用——」

#　笑顔をつくって男性客に小さく頭を下げる。働き始めて約一年。この動作にも慣れたものだ。

带着笑容对男顾客微微点头致意。这份兼职已经做了一年了。琉花早已习惯了这套动作。

#　客から離れ、店に備わった振り子時計を見ると、休憩時間に突入していることに気づいた。

从客人桌边离开，琉花看到店里挂着的摆钟，才注意到已经到休息时间了。

#「休憩入りやーす」

「我去歇会儿——」

#　カウンター内のに声をかけると、すっとアイスコーヒーを出してきた。休憩時間に飲め、ということらしい。礼を言ってそれを受け取り、スタッフルームのドアを開く。

一边对柜台里的店长打了声招呼，琉花顺手给自己打了杯冰咖啡。像是准备休息时间喝的样子。谢过店长之后，琉花拿着冰咖啡，打开了休息室的门。

#　スタッフルームの小さなテーブルに細身の女性が突っ伏していた。

打眼就看到一位身材纤细的女性趴在休息室的小桌子上。

#「ときわさん。おつっす」

「常羽小姐。你辛苦」

#「あ……琉花さん……お疲れ様です……」

「啊……琉花……你也辛苦了……」

#　琉花の同僚、ときわは顔をあげると、ずれたを直してんだ。彼女の前にはタブレットとスタイラスペンが置かれている。

琉花的同事，八木常羽抬起头，从戴歪的眼镜后面直直地笑着看向琉花。她的面前放着手写板和蘸水笔。

#「あれ、もしかして漫画描いてるんすか？」

「诶，难道是正在画漫画吗？」

#「そうです……ふふ、漫画を……描いています……バイト先で……ふ、ふふ……」

「是啊……嘿嘿，正在……画漫画……在打工的地方……嘿，嘿嘿……」

#　危ない笑いをらす眼鏡美人を眺めつつ、琉花はその正面に座った。

琉花盯着露出危险的笑容的眼镜美女，琉花在她的对面坐下了。

#　ときわは大学で漫画サークルに入っており、数ヶ月に一度の頻度でイベントに出すための漫画を描いていた。普段は家で作業していると言っていたのに、今は休憩時間をそれに割いているようだ。それはつまり、

常羽加入了大学的漫画社，在为几个月举办一次的社团活动准备漫画。尽管平时都只是在家里画画，现在却就连休息时间都用起来了。也就是说，

#「あーと、ときわさん」

「啊——对了，常羽小姐」

#「は、はい」

「什，什么」

#「シンチョクどうで……」

「进展怎样……」

#「ひぃえっ」

「噫啊」

#　ときわが体をのけぞらせる。詳細は不明だが、かなり追い詰められているらしい。

这句话常羽的身体一下仰了过去。虽然不太明白原因，但看样子差不多已经走投无路了。

#　ときわさんにはいつも仕事で助けてもらってるし、これは恩返しチャンスかも。

一直以来，常羽小姐总是在工作上给了自己许多帮助，这次说不定是报答她的机会。

#　琉花はアイスコーヒーを一口すすった後、ときわを見つめて言った。

琉花抿了一口冰咖啡后，看着常羽，开口了。

#「なんかあたしにできることってあります？」

「有什么我能帮得上忙的事情吗？」

#「る、琉花さん……いいんですか……？」

「琉，琉花……真的好吗……？」

#「当たり前じゃないっすか。ときわさんにはいつもお世話になってるし」

「当然啦。而且我也一直得到常羽小姐的照顾」

#「えんじぇる……」

「天使……」

#　ときわは眼鏡の奥のを潤ませると、ところどころ跳ねた髪をぎゅっと握って、

常羽眼镜后的双眼都湿润了，然后她抓了抓自己毛躁的头发。

#「じ、実は、漫画のアイデアが全然出てこなくて……なので、申し訳ないのですが……琉花さんの高校のお話をお願いしたいです……」

「其，其实，画漫画的点子已经弹尽粮绝了……所以，实在是麻烦你……我想要琉花同学和我聊聊高中的事情……」

#「あー、いつバナっすね。りょっす」

「啊——，就是日常聊天吧。懂啦」

#　ときわは漫画の資料と称して高校の話を聞いてくることがあった。

于是就开始和常羽聊起了她所谓漫画资料的高中生活。

#　ときわと話すことは楽しいし、報酬として漫画やケーキをもらえることもあるので、琉花としては喜んで協力したかった。ちょい前までときわさんも高校生だったのに高校の話する意味はあんのかな？　という疑問はあるが、聞こうとするとしそうな顔するのでうかつに聞くことはできなかった。

和常羽聊天十分开心，而且还拿到了漫画和蛋糕当作报酬，琉花当然是乐于帮这样的忙。不过琉花还是想起来，常羽小姐不是不久前都还是高中生，说这种话题真的有用吗？一听到这样的问话，常羽就露出了十分消沉的表情，然后琉花就不好意思仔细问下去了。

#　それにこっちだってあの子のことについて話したい気分だったし。

而且琉花自己也有点想和别人聊聊关于那个人的事情。

#「一昨日、クラスに新しい子が来たんすよ」

「前天，我们班上来了个新同学哦」

#「新しい子……転校生ですか？」

「新同学……是转校生？」

#「や、テンコーじゃなくて復学。よく知んないけど、休学してたらしくて」

「不是，不是转校，是复学。具体不是很清楚，但好像是之前休学了的样子」

#「休学……なるほど……」

「休学……这样啊……」

#　をうつときわの目に光が宿った。琉花の話に興味をかれているらしい。

听着常羽的附和，和她眼中的光芒。她看起来也对这个话题提起了兴趣。

#「んで、その子が目も髪も銀色でハデハデで。しかもそれが生まれつきらしくって。なんか、すごいっつーか。かっこいーっつーか……あ、あと、ずっと黒い手袋してて、を見抜けて、そんでもって超美人で……とにかくマジですごいんすよ」

「然后，她的眼睛和头发都是银色的，超吸引人。而且好像还是天生的。怎么说呢，超厉害。或者是超帅……还，还有，一直都戴着黑手套，而且还能看破谎言，甚至还超好看……总之厉害得超乎想象」

#　琉花が反応を待つと、ときわは、属性過多ですね、といた。

看到琉花在等她的回应，常羽小声地说了一句真是属性过多啊。

#「ゾクセーカタ？」

「属性过多？」

#「ぞ、属性過多というのは、その人が持っている要素が多いということで……例えば琉花さんだと、明るい髪だとか、女子高生だとか、ギャ、ギャルとか……」

「属，属性过多，是说一个人身上的特点太多了……比如说是琉花你的话，发色很明亮啊，女子高中生啊，辣，辣妹啊……之类的」

#「あー、確かにあの子はゾクセーカタっすね。ピアスとかガンガンつけてるし」

「啊，这么一说她确实是属性过多。而且还有戴那种会有响声的耳环」

#「ま、まだあるんですね……」

「居，居然还有啊」

#　クリエイティブな部分を刺激されているのか、ときわの声はうわずっていた。

不知道是不是得到了些许灵感，常羽的声音兴奋得有些尖锐起来。

#「き、きっとその方にはまだ秘密がありますよ……」

「那样的人身上，肯，肯定还有秘密的……」

#「ひみつ？」

「」秘密？

#「裏社会で生きてきた暗殺者とか。小国のお姫様とか。異世界からやってきた女騎士だとか……き、きっと彼女を取り合って様系美男子とか王子様系美男子が争っていたに違いありませんよ……！」

「生活于暗处的暗杀者啊。不知名国家的公主啊。从异世界穿越来的女骑士啊……肯定还有霸道总裁和王子因她而争风吃醋之类的事情」

#　ときわの声がどんどん大きくなっていく。トランス状態にっているのか、その目は焦点が合っていない。

常羽的声音慢慢地越来越大声。像是是陷入了自我陶醉的状态，目光已经开始飘忽起来。

#　この状態のときわも嫌いではないが、店としてはこの大声は問題になる。そう思って琉花が注意しようとすると、ときわは我を取り戻したようにをした。

这个样子的常羽倒也不坏，只不过在店里还是要注意嗓门。琉花这么想着，提醒了一下她。于是常羽空咳几声，看样子是回过神来了。

#「ま、まあ誰しも秘密があるということです」

「毕竟，任谁都会有自己的秘密嘛」

#「はあ……そんなもんすかね？」

「哈啊……是这样的吗？」

#「そうですよ」

「是这样的哦」

#　ときわの話を聞きながら、琉花は昨日の更衣室でのことを思い出していた。

听着常羽的话，琉花想起了昨天在更衣室发生的事情。

#　あの時の四十七は『私は近づいた理由を聞き出して、やめたほうがよいと伝えたかった』と言っていた。ときわの言う通り、彼女が明かすことのできない大きな秘密を持っていることは間違いない。

那时，四十七说『想问出她接近我的理由，劝她还是放弃更好』。正如常羽所说，四十七的身上显然有着不能暴露的秘密。

#　だからといって、暴く気はまったくないが。

所以，我对揭开这个秘密一点兴趣都没有。

#

#　午後九時。アルバイトを終えて帰路につく。

晚九点。打工结束，琉花迈上归途。

#　街灯のいた夜道を歩きながらカーブミラーを見上げると、少し離れたところに大柄な人影が見えた。

琉花走在点起路灯的街道上，抬头看了看立在街角的曲面镜。看到镜子里稍远处有一个魁梧的人影。

#『ビアンコ』を出てから数分間、あの人影は一定の距離を取って琉花についてきていた。何度か角を曲がったり、コンビニで時間をしたりしたが、あの人影が消えることはなかった。

从『比安珂』离开后过了大概几分钟，那个人影就一直保持着距离跟在琉花身后。不管琉花多少次走过拐角，故意在便利店打发时间，那个人影都一直跟着。

#　やっべ～～～～！　ストーカーじゃ～～～ん！

不妙啊~~~~~！跟踪狂啊~~~~~~！

#　男につけられた経験は何度もあるが、何度されても身の毛がよだつ。なんであんなことをするのか意味がわからない。闇に紛れて人の後ろをつけてなにをするつもりなのか。

不管被男人跟踪过多少次，被跟踪的时候还是会觉得鸡皮疙瘩立满了全身。琉花不知道他们为什么要做这种事情。隐藏在暗处，偷偷跟在别人的后面，到底是有什么打算？

#　を感じつつ、琉花は頭を働かせる。

尽管十分恐惧，但琉花还是转动起头脑。

#　このまま素直に帰ればストーカーに住所を知られてしまう。そうなれば琉花だけでなくにも危険が及ぶだろう。それは絶対に避けなければならないことだ。

就这样直接回家的话，就会被跟踪狂知道自己住哪里了。要是这样，危险的就不止是自己，可能还会波及到凉子。这是自己绝对不想发生的事情。

#　だが、この場で通報しても警察が来る間にストーカーは逃げてしまうし、駆けつけてきた警察からは、夜に出歩くな、とか、派手な格好してるからだ、と説教されるだけだ。

但是眼下就算报警，等警察过来的时候，跟踪狂早就跑掉了。至于赶来的警察，也只不过会说教自己几句「这么晚就不要出门了」，或者「还不是你穿得太花哨」之类的话而已。

#　琉花はスマートフォンを取り出し、通話相手のいない通話口に話しかけた。

于是琉花拿出手机，把手机放到耳边，假装打起电话来。

#「あ、お母さん？　あたしあたし」

「妈？是我是我」

#『誰かと連絡を取っている』という状況をつくり、ストーカーが引くことを期待する。

琉花做出『在和别人取得联系』的样子，希望以此把跟踪狂吸引过来。

#　本当に誰かと通話できればいいが、涼子はまだ仕事中だし、ひなるやめいりも反応がなかったので通話相手なしでいくしかない。そもそも『誰かと連絡を取っている』というのはストーカー対策として上策ではないが、今はこれしか手段がない。

要是真的能打给谁倒好了。但凉子现在还在上班，日菜瑠和芽里又都没有回信，所以就只好这样了。而且『在和别人取得联系』在面对跟踪狂的时候，本来也算不得是上策。只不过现在也没有别的办法了。

#「んー、今から帰るけど、なんか買ってきて欲しーもんある？　あ、ない？　おっけおっけ。りょーかいっす……」

「嗯——，我现在要回家了，你有什么东西要我顺路买回去吗？啊，没有？OKOK。知——道了……」

#　角を曲がる時に目を横に滑らせると、自販機のそばに無精髭を生やした男が立っていた。口元ににやつきを浮かべ、ろな目で琉花を見つめている。

琉花借走到街角转身的机会瞄向身旁，看到一个胡子拉碴的男人站在自动售货机的旁边。他嘴角带着轻浮的笑，毫无光彩的眼睛紧紧盯着琉花。

#　そっすか。ロックオン完了っすか。

原来这样。已经完全被盯上了啊。

#「んじゃ……ガンダで帰るわ」

「嗯那……我就直接回家吧」

#　スマートフォンをスクールバッグに入れる。結局最後に頼れるのは自分の足だ。

琉花把手机放回书包里。结果到最后，靠得住的还是自己这两条腿。

#　琉花がダッシュのために足に力を入れた時、

就在琉花绷紧双腿，准备逃跑的时候——

#「うわあああああああっ！」

「唔哇啊啊啊啊啊啊！」

#　後ろから野太い絶叫が聞こえた。

听到身后传来了惨烈的号叫。

#　振り向くと、ストーカー男がうつ伏せに倒れていた。

回头看去，跟踪狂已经倒在了地上。

#　男の動きを封じるように、体の上に黒いなにかが覆いさっている。人のように見えるが、頭部や腕部が奇妙に曲がっていて、人と断定することができない。その黒い塊は自販機のりに照らされると、粘土のような表皮を琉花の目に届けた。

一块不知何物的黑色东西，像是把他封印起来一样压在那个人身上。这个黑色东西头部和腕部都扭向了奇怪的角度，尽管有着人形却无法判断到底是不是人类。琉花借自动售货机的灯光看到它被照亮的表面，看起来就像是黏土一样。

#　あ、そーいうプレイ？

啊，是那种play？

#　きっとあれはボンデージスーツというものだ。見るのは初めてだが、そういう行為をする際に身につける服だということは知っている。

肯定是那个捆绑束缚什么的吧。虽然琉花是第一次看到，但还是知道那种事情会在身上穿着东西。

#　どんな性的も尊重するが、許容とはまた別の話だ。見えないところでやって欲しい。

虽说怎样的性癖都要尊重，但能不能接受就是另一回事了。这种事情还是不要在公开场合做比较好。

#　琉花がれていると、再び男の絶叫が聞こえた。

就在琉花愣住的时候，又一次听到了那个男人的哀嚎。

#「たすっ、助けてぇ！」

「救，救命！」

#　琉花はスクールバッグを投げていた。

琉花把自己的书包向着黑影扔了过去。

#　黒々しさに反して重さはあまりないらしく、スクールバッグが直撃した黒い塊はぐらりとよろけて男の上から転げ落ちた。男を逃がすなら今だ。

和黑黑的外观相反，那东西像是很轻的样子。被书包直接击中之后就轻巧地从男人身上滚落下去了。男人要逃跑就趁现在了。

#「おっちゃん！　ガンダ！」

「大叔！run！」

#「が、が、ががが？」

「润，润？」

#「ガンダッシュ！　走って！」

「快跑！逃！」

#　琉花の叫びに反応して、男はよろけながら黒い塊から距離を取ると、琉花がいる道とは逆方向に走っていった。

男人终于反应过来琉花的喊声，踉踉跄跄地拉开了自己与黑块的距离，然后向着街道的另一边跑掉了。

#　黒い塊は男を追いかけるわけでもなく、その場でじっと固まっていた。顔らしき部分をそばに落ちた琉花のスクールバッグに向けている。

黑块没有追过去，而是就那样一动不动地定在那里。有一块像脸一样的部分正好向着一旁琉花刚刚扔过去的书包。

#　やべ。おっちゃんに通報頼めばよかった。

坏了。要是刚刚有叫大叔去报警的话就好了。

#「あーと……邪魔したのは悪かったんすけどー……あたしもあーいうの見せられると困るっつーか……ハードなやつは家ん中でしてくんないかなと思うわけで……」

「那——个……打扰到你实在不好意思——……我要是被看到这样子也会很不好意思——吧……毕竟这种事情（ハードなやつ）应该都是在家里做的吧……」

#　琉花が手のひらを向けながら後ずさりしていると、口笛のような短い音とともにスクールバッグが宙に舞い上がり、そのシルエットがふたつに分かれた。

琉花双手合十，慢慢后退。突然，随着短短的一声口哨，书包飞到了空中，分成了两半。

#　開腹されたスクールバッグから、教科書、体操服、メイクポーチ、スマートフォンなどがこぼれ落ち、アスファルトにきつけられていく。

教科书、体操服、化妆包、还有手机等等纷纷从被一分为二的书包里掉了出来，磕到柏油路上。

#「は……？　え……？」

「哈……？诶……？」

#　琉花がその様子をと眺めていると、黒い塊はスクールバッグを切り裂いた細長いなにかをこちらに向けてきた。

琉花看到这一幕顿时愣在原地，但黑块又把刚刚切开了书包的某个黑色的细长条的东西朝向了自己。

#「ちょ、それはシャレにならんて……」

「等，这来真的吗……」

#　逃げろ、と本能が言っていたが、道路に転がるメイクポーチや財布を見ていると、なかなか足が動かなかった。あのポーチにはめいりとひなるから誕プレでもらったコスメが入っているし、あの財布はバイト代を奮発して買ったものだ。気軽に見放すことはできない。

自己的本能在高呼快跑，但琉花看到散落在路边的化妆包和钱包之后，又感觉迈不动腿了。生日的时候从日菜瑠和芽里那收到的礼物就在化妆包里，那个钱包则是自己奋力打工买来的。琉花没办法就这么轻易放弃。

#　命か金か。選ばなければいけない。

要命还是要钱。鱼和熊掌不可兼得。

#「ごめん！　今は命！」

「抱歉！现在还是要命！」

#　叫びとともに足を翻す。

琉花叫着转过了身。

#　この近くに交番はない。通報しようにもスマートフォンはスクールバッグに入れて投げつけてしまった。どこかの家に駆け込みたいが、このあたりにはマンションが多く、簡単に入ることができない。

这附近没有警察局。放在书包里的手机刚刚被扔到了一边，也没办法报警。这附近都是公寓，没办法跑到别人家里去。（应该是指一户建的院子）

#　あたし、運悪すぎじゃね？

我，运气也太差了吧？

#　授業とアルバイトで疲れた体に打って懸命に走っていると、真横に黒い塊が現れた。

拼命地驱动着这具被上课和兼职摧残过的身体奔跑，但黑块突然出现在了自己身旁。

#「え……？」

「诶……？」

#　それを眼前にして、琉花はした。

看到它忽然出现在眼前，琉花浑身战栗。

#　顔にあたる部分はマネキンのようにつるりとしていて、体から伸びたは腕と一体化していた。内臓が詰まってないのか、腰は腕ほどの細さになっており、足は四本も生えている。

长着脸的部分像是人体模型一样光滑，从身体上伸出的刀刃和手臂融为一体。就像没有内脏一样的腰部只有胳膊粗细，再往下延伸出四条腿。

#　怪物。

怪物。

#　この黒い塊にはその言葉がしい。

这黑块仿佛是这个词汇的化身。

#　目の前から発される死の気配に精神が揺さぶられる。自分はただの高校生。こんな怪物を相手にできるわけがない。だからといって、死にたくない。

摇曳在眼前的死亡气息动摇着琉花的意志。自己不过是个高中生。怎么可能与这种怪物为敌。但自己也不想死。

#「た、たすけ……」

「救，救命……」

#　わずかな望みにかけて大口を開くと────空にひとつの黒点が生まれた。

琉花带着渺茫的希望开口呼救——半空中出现了一个黑点。

#　その点はまたたく間に大きくなり、人の形をとると、琉花の背後に着地し、激しい金属音と衝撃を発生させた。

那黑点仅在眨眼间就靠了过来，可以辨认出人形。随后就落在了琉花的背后，发出了激烈的金属撞击声。

#　足をもつれさせながら振り返ると、ロングコートを羽織った人物が琉花と黒い塊の間に立っていた。フードを被っているため人相はわからないが、その手に持った銀色の槍と体から放たれる銀色の光は意識せずとも目に入ってきた。

颤抖着双腿回头看去，一个身披风衣的人站在琉花何黑块之间。那个人头上的兜帽遮住了脸，让人看不清样貌。但手持的银枪和身上放出的银色光芒一下子冲进了琉花的眼中。

#「間に合った」

「赶上了」

#　どこかで聞いた覚えがある、冬の空気のような声。

好像是在哪里听过的，冬天的空气一样的嗓音。

#　フードの隙間から銀髪が見えている。緊張状態の琉花でさえ、このロングコートの人物が誰なのかすぐに察することができた。

从兜帽的缝隙中可以看到银色的发丝。琉花即使十分紧张，但也迅速察觉了眼前身穿风衣的人到底是谁。

#「四十七さん……？」

「四十七同学……？」

#　琉花が尋ねると、ロングコートの人物が固まった。

听到琉花的询问，风衣人停下了动作。

#　あまりにもわかりやすい反応。この人物は間違いなく四十七銀華だ。

太过好懂的反应。果然她就是四十七银华。

#「な、なんでここに……」

「为，为什么你会在这……」

#「後で説明する。そこから動くな」

「这个之后再说。你先在那别动」

#　そう言った直後、四十七は黒い塊にしりを繰り出した。

说完，四十七就对黑块使出一记回旋踢。

#　四十七の攻撃を受け、黒い塊が反発する磁石のように吹き飛んでいく。近くの塀に衝突した黒い塊に対して、四十七は銀色の光を放ちながら距離を詰めていき、

遭到四十七的攻击，黑块就像被弹开的磁石一样飞到一旁。四十七全身释放着银光接近一旁撞到围墙上的黑块，

#「ハアアアアッ！」

「哈啊啊啊啊啊！」

#　勢いよくを振り下ろした。

猛地挥动银枪。

#　黒い塊の腕部が切断され、地面にぼとりと落ちる。

黑块的手臂被切断，重重地掉到了地上。

#「ひわっ……」

「唔哇……」

#　琉花の口から悲鳴が漏れる。

琉花小小地悲叹了一声。

#あの黒い塊がどういうものなのかわからないが、生物には違いない。それを四十七はなく切り捨てた。怪物の危険性や彼女が琉花を守ってくれていることはわかっていても、残酷さを感じる心は止められず……、

尽管不是很清楚那个黑块到底是什么，但肯定不是生物。四十七那么利落的切下腕部。虽然知道这是因为怪物危险，或者是她要保护自己，但看到这么残酷的场面还是无法平静……，

#「え……？」

「诶……？」

#　切り落とされた腕に奇妙な変化が訪れた。

被切断的腕部上开始出现了神奇的变化。

#　粘土のようだった肌からハリが失われ、葉脈のような細かいヒビが刻まれていく。表面に小さなブツブツが浮かび上がると、性質自体が砂のように変わり、やがてほろほろと形を崩していった。

黏土一样的皮肤表面逐渐失去光泽，转而浮现出许多像叶脉一样细小的裂痕。许多小小的凹凸出现在上面，随后开始变得像沙子一样，这样下去应该会慢慢地彻底崩解。

#　ど、どういう仕組みなん……？

这，这是怎么了……？

#　混乱する琉花の前で四十七と黒い塊の戦闘は続く。

混乱的琉花面前，四十七还在继续与黑块的战斗。

#　黒い塊は残った腕を刃に変えると、がむしゃらな攻撃を四十七に放った。四十七はそれをダンスでもするように難なく避けきると、黒い塊のに潜り込み、

黑块把剩下的一只手臂变成刀刃后，开始对四十七胡乱地进攻。四十七就像在跳舞一样轻巧的躲开，然后冲进了黑块的怀中，

#「消し飛べっ！」

「消失吧！」

#　叫びとともに銀槍を下方から跳ね上げた。

与怒吼一起，银枪从下往上挑起。

#　黒い塊は胴体を斜めに切断されると、糸の切れた人形のように脱力して動きを止めた。その体は先程落とされた腕と同じように黒い砂に変化していく。

黑块的身体被斜斜地切开后，就像断了线的人偶一样停止了动作。然后它的身体和之前的手臂一样，变成了黑沙。

#　突如として訪れた静寂の中、銀色美少女の声が響く。

在这片突然到访的静寂中，响起了银色美少女的声音。

#「相手に手間取るとは……私も鈍ったか……」

「和眷属都打成这样……我也变弱了吗……」

#　不満そうに呟くと、四十七は黒砂を長い足で蹴散らした。

不满地小声抱怨着，四十七用自己的长腿踢散了黑沙。

#　戦闘終了。戦いは四十七の勝利で終わったらしい。

战斗结束。看样子是四十七迎来了胜利。

#「バトルアニメじゃん……」

「动作片啊……」

#　目の前で繰り広げられた非現実的な光景に対して、琉花はそう呟くしかなかった。

面对在自己面前发生的脱离现实的事件，这是琉花仅有的感想。

#　琉花が半ば思考を放棄していると、四十七が近づいてきた。

琉花差不多已经放弃思考了。四十七走了过来。

#「盛黄。負傷はないか？」

「盛黄。有哪里负伤了吗？」

#　その姿は激しい戦闘を繰り広げたとは思えないほどいつもの四十七銀華で。だからこそ寒気を感じた。なぜこの異常事態の中で平静を保てるのか。

眼前平常的四十七银华，让人无法想象她刚刚进行了那样激烈的战斗。所以琉花才更感到后颈生寒。为什么她能这么冷静地面对这种事情？

#　琉花は黒い砂を指差し、無理矢理口を開いた。

琉花伸手指着黑沙，强行让自己开口了。

#「ころ……こ、殺したん？」

「杀……杀，你杀掉了？」

#「いや、殺害したわけではない。滅却したんだ」

「没有，当然不是杀掉。是消灭了」

#「メッキャ……な、なにが違って……」

「消灭……有，有什么区别……」

#「人ではない。ということだ。今の怪物の正体は、これだ」

「因为，那不是人。刚才的怪物的本体，是这个」

#　四十七が黒砂を蹴ると、毛むくじゃらの小さなものが転がり出た。

四十七踢向黑沙，一个长满毛的小东西从沙堆里滚了出来。

#　ネズミの死体だった。

是一只死老鼠。

#　ますます怖いっつの！

更恐怖了！！

#　がスイッチとなったのか、琉花の頭が運動を再開する。

惊吓似乎成了个开关，让琉花的脑袋重新运转了起来。

#　なぜネズミがあんな姿になったのか。なぜ四十七はそんなことを知っているのか。どうしてこの場にいきなり現れたのか。銀色の槍や銀色の光はなんなのか。

老鼠怎么会变成那样？为什么四十七知道这样的事情？为什么她会突然在这里现身？银色的枪和那银色的光芒是什么？

#　時間がつとともに四十七に対しての疑念が膨れていく。

随着时间推移，琉花对四十七的疑问越来越多。

#「四十七さんって……なんなん？」

「四十七同学……你是什么？」

#　結局のところ、それが一番聞きたいことだった。

从结果看，这是琉花最想问的问题。

#「私はヴァン……、いや」

「我是吸……，不是」

#　四十七は少し言いよどんでから、難しい表情を浮かべて言い直した。

四十七刚说了开头，却又带着复杂的表情改口了。

#「私は元、ヴァンパイアハンターだ」

「我曾经，是吸血鬼猎人」

#　はっきりと言い切った四十七を見て、琉花の脳裏にときわの声が蘇った。

看着一字一句斩钉截铁的四十七，常羽的声音再一次回响在琉花的脑海中。

#　──誰しも秘密があるということです。

——任谁都会有自己的秘密嘛。

#　元ヴァンパイアハンター。

前吸血鬼猎人。

#　これが四十七銀華の秘密らしい。

看来这就是四十七银华的秘密。

#「……マジ？」

「……真的？」

#

#